

中国勤務を望んだ気概ある外交官

伊集院彦吉

駐清国（中国）公使

外交史家・法学博士 松村正義



【いじゅういん・ひこきち（1864～1924）とその時代】1900年義和団事件。1901年伊集院、天津領事。1904年日露戦争。1908年伊集院、駐清国公使。1911年辛亥革命。1912年中華民国成立。1914年第1次世界大戦。1919年パリ講和会議。1923年伊集院、外務大臣。1924年、死去。1931年9月満州事変。

（写真・外務省外交史料館所蔵）

とにもかくにも第1次世界大戦を結末づけるべく、1919

年1月に開かれたパリ講和会議。中国の山東半島をめぐって、日中間で熾烈な言葉の応酬が交わされること予想された同会議に、西園寺公望、牧野伸顕、松井慶四郎に続き全権として任命されたのが、当時、駐イタリア大使としてローマにあった外交官・伊集院彦吉であった。

全権としてパリ講和会議に参加

第1次世界大戦で、それまでドイツの租借地であった山東半島を占領した日本が、同会議で半島におけるドイツの諸権利を一旦所有した後に返還すると主張していたのに対し、中国は直接返還を強く要求していた。このため日中間で激しい対立が予想されており、実際、陸徴祥りくちやうしょうを主席代

表とする中国代表団が英語に極めて堪能な王正廷や顧維均といった代表らを通じて行った反日宣伝活動は、すさまじいまでのものがあつた。

このように紛糾が予想された同会議に、伊集院は全権の一人として臨むことになる。伊集院へのパリ出張命令は、中国代表団による激しい反日的宣伝攻勢に備えたためであつたろうことは間違いない。なぜなら伊集院は、英・伊という列強での勤務経験を持つだけでなく、中国に長く勤務したチャイナ・スペシャリスト（中国通）として、当時の中国事情や中国人の国民性によく通じていると目されていたのである。

英国勤務を経て天津総領事へ

1864年6月19日、伊集院彦吉は鹿児島市高麗町で薩摩藩士・伊集

院吉次の次男として生まれた。成長して東京に出た後、1890年には帝国大学法科大学を卒業、すぐに外務省に入る。1892年から外務省翻訳官を務め、翌年、中国・芝罘在勤の副領事となる。これが、伊集院と中国との実に16年にも及ぶ縁故のはじまりであつた。

しかしこの芝罘勤務は1年ほどで、1894年には三等書記官として在英公使館に配属され、同年7月に始まる日清戦争を英国から見守ることになる。1896年7月に一旦帰国を命ぜられるものの、9月には一等領事として釜山駐在となった。そして仁川の勤務を経て1901年2月、天津領事に任ぜられる。伊集院は、翌年1月には総領事に昇格するが、大久保利通の娘である妻・芳子を呼び寄せ、1907年2月に大使館参事

官として再び英国へ赴任するまでの6年間をこの天津で過ごした。

天津の日本人居留地経営に功績

天津での伊集院は、その豪放磊落ごうほうらいらくな性格から、正式には総領事ながら皆から好意をもって「伊集院公使」と呼ばれていたという。

伊集院が赴任した当時、天津では日本人居留地の経営が始められてまだ間もない頃であつた。居留地として予定された地域は、フランス租界と天津城の間にある猫の額ほどの狭く汚い区域で、当初はその開発も容易に進まなかつた。伊集院は諸外国の租界地と比べて貧しい日本人居留地の様子を憂慮し、交流を深めていた天津駐留の日本軍司令官・秋山好古とも協力して、開発を進めていく。そして、彼らの督励と尽力によって、

当初3000人程だった居留民もやがては1万3000人にも達し、天津は華北地方における日本の政治的・経済的策源地として重要な役割を担うようになったのである。

日露戦争時、袁世凱と交流

伊集院が天津に赴任してから約3年、まさに日露戦争（1904～1905）開戦前夜ともいべき時期、日本と中国は、ロシアの朝鮮半島への南下および旅順、大連等における權益をめぐり、互いに接近する必要に迫られていた。伊集院は当時の北洋大臣兼直隸総督の袁世凱と親交を結んでいく。そして伊集院と袁が昵懇の仲となると、袁配下の唐紹儀ら中国要人も次第に日本人に親しみを示して交際を求めてきたという。さらに伊集院は、日露戦争中、天津で

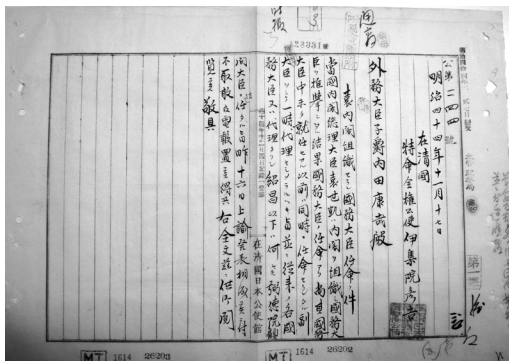
発行されていた漢字新聞『大公報』の社長兼主筆の英剣之を招待して日本へ取材旅行に赴かせ、今で言う外国人新聞記者の招待取材旅行の嚆矢を創っている。

辛亥革命と駐清国公使留任

しかしその密接な間柄も、親しくなり過ぎるとそれが裏目に出てしまうこともある。日露戦争後の1908年6月、伊集院は駐清国特命全権公使として北京駐在となるが、1911年10月、中国を揺るがす辛亥革命が起る。当初、日本を含む諸外国は、立憲君主制を目指す袁世凱を支持する立場にあった。しかし、革命の趨勢が次第に孫文らの目指す共和制の実現へ向かったことで諸外国も革命派を容認するようになっていき、袁に肩入れしすぎたこと、さら

には袁自身、中華民国の臨時大統領に就任するという転身を図ったため、伊集院の外交的失敗とならざるを得なかった。よって伊集院は、自ら駐清国公使の解任を求めたが、内田康哉外相からは「貴官ノ進退ハ時局ニ容易ナラサル關係ヲ有スル」（日本外交文書）として留任されている。

対外政策的な面があるにせよ、天津時代から数えると伊集院の中国在勤はすでに10年に及んでおり、この大事な時期に、中国、そして中国をめぐって諸外国と渡り合う人物として、彼以上の「チャイナ・スペシャリスト」はいなかったであろう。また、苦楽を重ねれば、かえって愛着心が涌くものである。伊集院は欧米での勤務よりも、中国での勤務を望むようになっていく。実際に、1916年2月に駐イタリヤ大使となる



辛亥革命後期、袁世凱は清朝の内閣総理大臣となるが、革命派と結んで清朝を裏切り、中華民国の臨時大總統となる。史料は、伊集院が内田外相に袁の内閣総理大臣就任を伝えるもの。(外務省外交史料館所蔵)

まで中国の地にあり、さまざまな懸案解決に取り組んだのである。 初代情報部長から外務大臣へ

1919年のパリ講和会議における中国側の対日宣伝攻勢は、日本の予想をはるかに超えた熾烈なものであった。「サイレント・パートナー」とまで揶揄された日本の劣勢ぶりを

眼前にした日本全権団の若手外交官らは帰国後、外務省内に「革新同志会」を結成し、組織改革に乗り出す。そして、実質的には1920年4月1日から(官制上は翌年8月15日付)

外務省に情報部を誕生させ、初代情報部長に伊集院が就任する。

伊集院の情報部長としての任期は、1922年に田中都吉と交替するまで2年に及んだ。その間、彼は外務省情報部をさらに発展・拡大させ、将来は外交の情報機関の参謀本部とも言うべき統一的な政府広報機関の設立を夢見ていたようであった。

その後、伊集院は関東長官を経て、1923年8月末に誕生した山本権兵衛内閣の外務大臣に就任する。ところがこの内閣は、誕生早々に関東大震災に見舞われた上、年末の虎ノ門事件で総辞職となり、伊集院の外

相歴も3カ月の短命に終わった。それからわずか4カ月後の1924年4月26日、伊集院は胃がんのため急逝する。享年61歳であった。

【参考文献】『改男爵伊集院彦吉十周年忌追悼誌』(伊集院彦吉十周年追悼会)／野村乙二郎「伊集院彦吉論(政治経済史学会編『政治経済史学』101号)／対支功労者伝記編纂会『対支回顧録(下巻)』列伝／信夫淳平『外交側面史談』(聚芳園)／松村正義「外務省情報部の創設と伊集院初代部長」(国際法学会『国際法外交雑誌』第70巻第2号)／戸部良一「外務省革新同志会」(中公新書)／松村正義「日露戦争と日本在外公館の、外国新聞操縦」(成文社)

松村正義 まつむらまさよし
1928年福井県生まれ。東京大学法学部卒。1952年外務省入省。1970年ニューヨーク領事。1975年国際交流基金勤務。1979年法学博士。1985年コロンビア大学東アジア研究所客員研究員。1988年帝京大学教授。2003年日露戦争研究会会長。主な著書に『日露戦争と金子堅太郎—広報外交の研究—』(新有堂)、『ポーツマスへの道—末松謙澄とヨーロッパの黄禍論—』(原書房)、『新版 国際交流史—近現代日本の広報文化外交と民間交流—』(地人館)、『日露戦争100年—新しい発見を求めて—』(成文社)他、論文も多数。

外務省外交史料館
〒106-0041 東京都港区麻布台1-5-3
TEL: 03-3585-4511
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/>